



壁面を分割して撮影し、専用ソフトで統合した11号墓の奥壁壁画写真
(作成：山崎領平)

資料紹介 かんぶり穴横穴墓群11号墓奥壁壁画

横穴墓とは5～7世紀の時代、丘陵や台地の斜面に水平方向に横穴を削って掘って造った埋葬施設です。竖穴式の埋葬施設と違って入口の開閉ができるため、横穴墓は後から亡くなった人を同じ穴に埋葬する「追葬」ができることで、一時期流行しました。

市内では、十王町から久慈町の間で発達した台地の崖を利用して31か所に横穴墓が造られており、総数は354基と数えられています。そのうちの一群が十王川沿いの崖面にある「かんぶり穴横穴墓群」です。29基の横穴で構成されていて、そのうちの3基(2号墓・11号墓・14号墓)には装飾があります。この装飾の重要性から、昭和56年(1981)に日立市の指定文化財になりました(指定名称は所在地の字名から「十王前横穴」となっています)。

今回紹介するのは11号墓の奥壁壁画です。死者を納める横穴の奥壁上部には線刻や彩色で赤と黒の連続する幾何学的な三角文が描かれ、中央部には同じ角度で斜めになった四角い区画と直線、さらに小さな三角形が描かれています。昭和40年代後半、この横穴墓群が目ざされた際には連続三角文のほか、中央には盾や鞍などの武具が描かれていたと考えられていました。

令和2年(2020)には、東京藝術大学(当時)の山崎領平によるデジタル機器を使用した調査によって、上部に

は2段にわたって赤と黒の連続三角文が描かれていたことが明らかになりました。さらに、下部にも2段にわたって連続三角文が描かれていたことが分かりました。

装飾古墳は5世紀に北部九州で生まれ、各地に広まっていきました。現在全国に約700基の存在が知られていて、その半数は九州に分布しています。関東地方や東北地方にも存在が知られている中で、茨城県内では14か所の装飾古墳があります。そのほとんどが線刻あるいは彩色のみの装飾ですが、両方の技法が使われているのはひたちなか市の虎塚古墳とかんぶり穴横穴墓群のみです。

古墳内部は入口を閉じると暗く、生きている人には灯りがないと装飾は見えません。見えない部分に描かれた壁画は、死者に対する何らかの思いが託されたものと考えられそうです。副葬品だけではなく、壁画にも注目して当時の人々に思いを馳せてみてはいかがでしょうか。

(滑川有花子)

- ◆かんぶり穴横穴墓群から出土した副葬品は収蔵資料展「日立のここにもあそこにも遺跡あります」(5月12日まで)で展示しているほか、収蔵資料展終了後は常設展示室でも展示します。

郷土博物館勤務と「ふるさと教室地学」を振り返る

田切 美智雄

私は2010年（平成23）3月に茨城大学を定年退職してすぐ、日立市郷土博物館に勤務することになりました。日立市の山地にカンブリア紀の地層を発見した直後であり、新聞報道等でも盛んに取り上げられていました。カンブリア紀層の研究は始まったばかりで、大学を退職しても研究を続けたい私にとってはありがたい誘いでした。用意していただいた四輪駆動の軽自動車のおかげで機動的に野外調査をすることができました。この調査がなかったら、研究はまとまらなかったと思います。ちなみに茨城大学大在職中に測定したカンブリア紀層の年代は4個でしたが、博物館在職中に5個追加できました。

赴任した初年度には地学の講座を始めることはできませんでした。次年度の講座を準備している最中に東日本大震災が起き、博物館も大きく被災して活動が制限されたことによって、2011年も講座を開催することはできませんでした。一方、日立市内の地震と津波の被災状況の調査が必要となり、私は日立市海岸部全域の津波被害調査に取り組みました。

2012年から「ふるさと教室地学」を始められるようになり、この年に3回の講座を行いました。講座を企画するにあたっていくつかの方針を決め、講座の内容を調整することにしました。

最も重要な要素は「ふるさと」、つまり地元のネタを仕込むことです。大学の先生の理科の話ですから、たいいていの市民には「難しそう」「つまらなそう」と感じられるかもしれない。しかし地球や日本の大地の話に地元ネタを仕込むことによって話題が身近になり、興味を持ってもらえて「聴いてみよう」と思ってもらえるのです。テーマ自体も地元のネタを仕込みやすいものにします。ネタの仕込みが成功すれば、受講者を得ることができると考えました。

次の要素は難易度です。これは簡単ではありません。地元のネタを仕込んだテーマであっても、地学の話で、スケールが極めて大きく、しかも、何億年も前のことから現在までの話ですから、簡単なはずはありません。テーマを理解するには地学の基礎知識が必要になります。難しい話でも受講者をわかったつもりにさせる仕掛けが必要です。最小限の基礎知識を与えて、それだけでわかったと思わせるのです。そのため、図解が必須になります。フルカラーのモデルやアニメーションを作成し、

解説の重要な部分とします。この仕掛けによって、受講者は話について来れるようになります。この仕掛けがうまく働いている時は、受講者の目は輝いているのですが、まずい時は寝ている人が多くなります。他人が作ったモデルや図をそのまま使える時は準備も楽なのですが、多くの場合作り変えなくてはならず、講座準備の大半をこの作業に費やすこともあります。絵のきれいなことも重要になります。わかりづらい絵は理解が難しくなります。

こんな具合で月一回の講座を準備するのですが、大学での授業の準備より大変です。大学では自分の得意とする狭い分野に限って講義を組み立てるのですが、市民向けのテーマですから、専門分野の内容のみでは作れません。地学の分野を飛び出すような話題も取り入れなければなりません。市民の興味を引き、しかもその年の時事からテーマを選ぶのには苦勞しました。利用率は高くなかったようでしたが、理解促進のために講座資料を博物館のホームページに事前に掲載しました。

12年間で110回の講座を実施し、6155名の方に受講いただきました。12年間継続できたことは、私の目論みがある程度成功したのだと思います。この中にはほぼ全回参加された方もおりますが、数回しか参加できなかった方も多数おります。キャンセル待ちになってしまうことも多く、受講できなかった方も多かったようです。会場の大きさや設備の問題もあり残念でしたが、市役所多目的ホールを使うようになってから、かなり改善されました。令和6年度は回数を減らして実施予定ですが、さらに充実した内容にしたいと思っています。

（たぎり みちお 日立市郷土博物館特別専門員）



2024年3月13日の「ふるさと教室地学」のようす